

「ドイツ文化」という瞞着： 日独文化構造比較の試み

貫 成 人*

トゥキディデス、プルタルコス、ギボンなどによる歴史記述は古来、ヨーロッパに存在したが、「歴史学」が生まれたのは、1810年ベルリン大学に歴史学講座が設立され、ランケなどによる実証的歴史研究が開始されてからのこととされる。その様をヘイドン・ホワイトは次のように描いている。

歴史学講座はベルリン大学には1810年、ソルボンヌには1812年に設けられた。史料編纂、出版のための機関がそれに続く。…こうした機関への政府補助金は、時のナショナリスト的な共感に鼓舞されて1830年代に設けられた。十九世紀後半には〔ドイツ、フランス、イタリア、英国など〕各国の史学雑誌が刊行を始める。…歴史研究は瞬く間にアカデミックなものとなった。(MH 136, 参考 Anderson320)

とはいえ、最初の「近代大学」、ベルリン大学は、その初代総長ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767～1835）による「フンボルト理念」によって、現在では名をなしている。「フンボルト理念」は、大学における学問の自由、教養教育重視、教育に対する研究の優位などを謳ったものだが、古代ギリシア・ローマ以来の文化・教養の理念、ゲーテやカントなどに代表される「ドイツ文化」を体現するものとされ、20世紀には日本、アメリカ合州国などの大学にも導入された。近年の文部科学省による人文社

*専修大学文学部教授

会系学部に苛酷な政策に抵抗する拠り所としても、フンボルト理念はしばしば言及される。

とはいえ、本稿の目的は、こうした「ドイツ文化の優位」を称揚・顕彰することではなく、むしろその神話性を解体することにある。「ドイツ文化」は長い伝統を持つものでも、古代ギリシア・ローマの嫡子でもなく、自生的というより人工的・政策的な存在だった。以下、いわゆるドイツ、あるいはヨーロッパの文化的優位が主張される際の論点を確認し（Ⅰ）、ついで、いわゆる「ドイツ文化」が形成されるにいたるまでのドイツの状況の検討を通じて、当該地域の文化構造がいかに特殊であるかを明らかにする（Ⅱ）。それと同時に、「ヨーロッパの文化的優位」の神話も相対化される（Ⅲ）。一方、ドイツの文化構造の特殊性を際立たせるには、「日本」におけるそれと比較することが有益である（Ⅳ）。

I ドイツの「文化的優位」

「極東」の地、日本からみると、ドイツはヨーロッパのほぼ中央に位置し、他のヨーロッパ諸国とならび、あるいは凌駕する「文化」を誇る、輝かしくも眩しい存在であるかのようにうつるかもしれない。

そもそも、まずもってヨーロッパ自体が、「アジア」「アフリカ」「南北アメリカ」などに対して「文化的優位」をもつものとされる。「近代」の理念を支える「理性」「科学」「民主主義」「数学」「哲学」などはすべて、ヨーロッパの「源泉」である古代ギリシアに起源をもつと言われ、大学教育や技術的発明など、ヨーロッパはつねに文化芸術科学などの面で世界の頂点であったかのように語られる。中世盛期、11世紀に生まれたボローニャ大学（1088）を嚆矢として各地に早くから設立された無数の高等教育機関、14～6世紀、芸術・芸芸ばかりではなく、紙・羅針盤・火薬という「三大発明」も生まれた「ルネサンス」期、1215年のマグナ・カルタ、18世紀、

ヴォルテール、ジョン・ロックなどによって唱えられた自由思想や社会契約論、ゲーテンベルクによる『聖書』活版印刷(1455)、信仰を通じて個人の自立、勤勉を可能にした、ルターなどによる「宗教改革」(1517)などが、「ヨーロッパの優位」の証としてしばしば言及される事例である。

なかでもドイツは飛び抜けた存在であるかのようにみえる。カントからドイツ観念論を経てヘーゲル、さらに、ニーチェ、フロイト、マルクスの「グレート・ジャーマン・トリオ」にいたるドイツ哲学、ゲーテ、シラー、ヘルダーリンなどドイツ文学、ベートーヴェンからワグナー、ブラームスなどドイツ音楽が、各分野の古典として尊敬され、現在でも標準とされ、また愛されてもいる。

しかも、ドイツ「文化」は、古代ギリシア以来の伝統の正当な嫡子とされる。そもそも「文化(Culture, Kultur)」は「耕す(cultivate)」という意味のラテン語に起源をもち、その真髄は「Cultura animi philosophia est. 哲学とは魂を耕すことである」というキケロの語にあらわれるが、フランスの文明に対して、道徳的な文化を実現するのがドイツ民族だというわけである。

実際、「魂を耕す」という理念から、Bildung(「教養」というドイツ語が生まれ、ドイツ文化の神髄とされる。Bildungの元となった動詞bildenは英語ではbuild, すなわち「建てること, 作ること」だが、Bildungはとりわけ人格形成、ひとりの人間としての成長、一人前になる過程を意味する。この語は英語ではeducation, Refinement, Cultureという平板な語彙に訳すしかなく、ドイツ語独特の概念と言える。

Bildungの理念を端的に表すのがBildungs-roman, すなわち、教養小説だ。ゲーテ『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796), 『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829)はその代表とされ、その概要は、「主人公ヴィルヘルムが演劇人になろうとするが、挫折し、社会改革を願って、各地を遍歴し、様々な人に出会い感化を受け、成長し、最終的に家族や仲

間たちとともに新天地アメリカへと旅立つ」というものである。

フンボルト理念は、Bildung という理想を具体化したものである。1527年、領主がつくった官僚養成組織としてのマールブルク大学、18世紀、近傍の貴族子弟むけに設立され、1734年、官僚育成目的に転換されたゲッティンゲン大学（グラフトン406）などと異なり、「最初の近代的大学」としてのベルリン大学は、アメリカ合州国や日本などの近代大学の設計にも影響を与える。大正教養主義はフンボルト理念導入の結果だった。ちなみに、ベルリン大学哲学講座初代教授はフィヒテ、2代目はヘーゲルである。

「文化」「教養」重視は、現在のドイツ連邦共和国における文化政策にもうかがうことができる。州政府・中央政府による潤沢な文化助成予算によって、地方都市をも含む各都市には、オペラ劇場、オーケストラ、演劇、バレエ・ダンス（タンツテアター）などの専用劇場、公立カンパニーなどが整備され、市民はきわめて安価に「高級芸術」を楽しむことができる。そのメカニズム・予算規模は、日本はもとより、アメリカ合州国など諸外国からも羨望の的である。

ベルリン・フィル、ミュンヘン・オペラ、ドイツ・グラムフォンなど、ドイツ文化は、現在もなお、世界に燦然と輝き、諸外国の人々を魅了し続けているように見える。だが、そのような文化構造は、いつ、どのように形成されたのだろうか。

II 「ドイツ文化」の実態；「ドイツ神話」の相対化

古い伝統を誇るかに見える「ドイツ文化」が形成されたのは、実のところ、ごく最近であり、その実態に関しても、一見したその外見とは乖離している疑いがある。

§ 1 スタール夫人の驚愕

そもそも、ヨーロッパにおいてドイツが「詩と音楽と哲学の国」として「発見」されたのは19世紀になってからのことである。1805年前後ドイツを旅したスタール夫人（1766-1817）は、それまで「よい精神や優れた学問はない」とされてきたドイツに、ベートーヴェン、ゲーテ、カントなどを「発見」、驚愕し、『ドイツ論』（1810著、1813年出版）を発表する。王党派で立憲君主制を主張してナポレオンを批判し、さまざまな弾圧を受けたスタール夫人にとっては、ナポレオンの仇敵ドイツを賞揚することが政治的プロパガンダの一環だった。とはいえ、とりわけ音楽に関して、18世紀のフランス人大音楽家はラモー（1683-1764）ひとりを数えるのみであり、次はベルリオーズ（1803-69）（吉田2015, 82）になってしまうのも事実であるため、フランスは「遅れて」（吉田2015, 74）おり、イタリアとドイツの後を追う、音楽「後進国」（吉田2015, 81）に転落したという認識がひろまった。

だが、なぜそれは「驚愕」だったのだろうか。それは、18世紀まで、ドイツには何もなかったからである。

§ 2 18世紀以前

ここで、現在、ドイツと呼ばれる地域の過去を簡単に振り返る必要がある。

ゲルマン民族大移動は375年前後とされるが、その頃、この地に侵入したひとつひとつにより、フランク王国が創設され、975年神聖ローマ帝国、「第一帝国」が生まれる。その後、教皇権と王権とのせめぎ合いのなかで、ハンザ同盟設立（1241年）、ルターなどの宗教改革（1517年）などがつづくが、他の地域と比べてドイツ地域の特性は、その分封体制にあった。すなわち、当該地域にとっての「中央」、たとえばユーラシア大陸東部における漢や唐、西部における古代ローマ帝国の求心力が弱まると、その辺境である日本やヨーロッパは封建化するのが通例であり（清水・高野2015, 62）、

その結果、「英仏スウェーデン、ロシアでは、中世の封建的身分制度から中央集権化や統合がすすんだ」（エリアス1996／2015、4）。ところが「ドイツでは中世的帝国が解体したのち、諸小国の覇権争い」（エリアス1996／2015、4）がつづいたのである。

ドイツの文化構造にとって決定的な意味をもったのは30年戦争（1618～1648）だった。列強激突の主戦場となったドイツ地域では、形成されつつあった都市や農地などが徹底的に破壊荒廃し、人口の三分の一が失われる。17世紀は、英仏など他国にとっては輝かしい発展の世紀だったが、ドイツにとっては「貧困化の時代」（エリアス1996／2015、5）だった。社会は中世状態に逆戻りし、ハンザ同盟は痕跡すら残さず、消滅する。以来、ドイツでは商人の活動を名誉あるものととらえる心性は失われる（エリアス1996／2015、63）。その一方で、この地域では戦争が絶えなかった。17世紀後半には、ルイ14世軍侵攻によりハイデルベルク城が炎上し、19世紀にはナポレオン軍に蹂躪されるなど（エリアス1996／2015、6）、ある時期までのドイツ地域はつねに、失敗と敗退、衰亡、分裂続きの歴史に彩られていた。

それは、この地域住民のメンタリティにも反映する。エリアスは『ドイツ人論』で次のように述べている。「イギリスでは…国民的な誇りや傲慢がしっかりと根付いているために、イギリス人自身はそれを茶化して、外国人の笑いやウィットもある程度まで我慢することができた。ドイツでは…国民的プライドを傷つけるようなことを茶化することは…タブーであった。…すぐ侮辱されたように感じやすかった。見下されているのではないかという疑念 [は晴れず]… [すぐ] 腹を立て…優越感をことさらに強調しがち [だった]…」（エリアス1996／2015、178）。

エリアスはまた、『文明化の過程』において、エラスムス『少年礼儀作法論』『旅館』をもとに、16世紀ヨーロッパ人の自我構造を明らかにしている。それによれば、他人と共有の鍋に自分の食べ残しの骨をもどす、面

と向かって友好的に話している相手の方にむかって唾液を吐く、など、自他の区別がつかず、プライドが高くてすぐに激昂するのが中世的メンタリティだった。こうした心性は、19世紀まで中世的社會状況を残していた現在のドイツ地域に長く残ることになる。

ヨーロッパ近世は魔女裁判の時代でもあった。魔女を非合法とする体制は、15世紀半ばから18世紀末の350年間つづいたが、ヨーロッパ全体の魔女裁判犠牲者4万人のうち、多くはドイツ語圏でのものだった。より詳細には、人口90万人のバイエルンで2000人、35万人が住んだマインツで1800人、22万人口のケルンで2000人、75000人の人口を持つトリーアで1000人が魔女として処刑されたのである(小林, 7)。

しかも、ドイツは18世紀まで、音楽、絵画、文学、哲学などあらゆる点で取るに足らない存在であった。ルネサンス期(14~16世紀)には、みずから、「非音楽的民族」(吉田2013a, 15)と自認し、17世紀前半にはイタリア音楽(吉田2013b, 17)、17世紀後半には、とりわけ、イタリア出身のリュリの影響が顕著であり(吉田2013b, 18)、18世紀前半になってようやく「ハンブルクのドイツ語オペラ運動」が生じるものの、18世紀半ばには、仏伊の「混合趣味をドイツの趣味と」よぶのが大勢だった(吉田2013a, 11, 吉田2013b, 19)。

§ 3, ドイツの急成長

こうしたドイツ地域が、それでは、どのようにして「文化大国」になったのだろうか。その実態はいかなるものだったのだろうか。その秘密を握るのが「教養市民層(Bürgertum)」とよばれる階層である。

教養市民層とは、1800年前後に形成された階層であり、教会や宮廷に属さない「第三身分」ながら、ギムナジウムにおける古典語教育・大学教育を受け、リベラリズムと高度な教養、公共意識をアイデンティティとするひとびとである。職種としては、大学教授やギムナジウム教員、アカデミ

一会員、行政官、司法官、裁判官、プロテスタント聖職者、医師、薬剤師。公証人、弁護士、著述業、芸術家、ジャーナリスト、編集者などが挙げられる。教養市民層は、いったん形成されると、その後継者は子弟から補給された。大学出身者が軍隊の予備将校資格をもつ制度、また、ギムナジウム教員のための国家試験制度を整備（野田29）するなど、経済力よりも国家による社会的威厳を持つことがかれらにとっては重要だった。宗教的にはプロテスタントに限られる。かれらは「文化エリート」を自認し、社会や国家に関する構想を形成・流布する、社会のイデオログとして機能した（野田14～15）。その規模は、ドイツ帝国への統一前2～30年における学生登録数が1万数千人で、同世代の0.58%であったこと、1852年のプロイセンで教養市民層の職業従事者が3万五千人、0.64%であったことから推測できる（野田34）。レッシング、ヘルダー、また、『古代芸術史』（1764）で知られたヴィンケルマン（曾田41）が教養市民層出身の知識人であり、当時の、古典文献学、言語学、心理学、音楽の担い手（吉田2015, 21）、またはその取り巻きであった（野田）。

教養市民層の出現は新人文主義の登場と軌を一にしていた。14～6世紀、いわゆるルネサンス期に登場した人文主義に対して「新人文主義」とよばれるこの学派においては、キリスト教ならびに古代ギリシア・ローマとともに、ドイツ・ゲルマンへの信仰（Geist, 11）がその特色であり（曾田9）、人間形成や教養 Bildung がその理念であった。

新人文主義の代表者であるフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ（1783～1816）は、ハレ大学・ベルリン大学で教鞭を執り、古典語や古典教育の制度化（曾田57）に尽力した。学校教育などにおけるドイツ語の台頭によるラテン語の衰退、また、当時の海外植民地建設のため古典的な伝統に動揺をきたしたことがその背景にはあった。主著である『ホメロスへの序論あるいはホメロスの作品の古い真正の形態、様々な伝承と確からしい校訂の根拠について』（曾田58）は、ホメロスに自然・天才・民族を読み込む

ものであり(曾田60)、フランス古典主義への対抗原理となって(曾田61)、ゲーテ(1749-1832)やシラー(1759-1805)、ヘルダー(1744~1803)、シュレーゲル(1772~1829)などによるドイツ語叙事詩の創作、グリム兄弟などによるドイツの伝統発掘を促した(曾田68。ただし、グリムが「発掘」した民話はフランス起源だった)。『ホメロス序論』は19世紀ドイツで広く読まれ(曾田70)、ドイツ人文主義の古典となった。

一方、思想・哲学においては、フィヒテ(1762~1814)、ヘーゲル(1770~1831)などがあらわれ、19世紀にはヘーゲルがイギリスをも含む欧州で、20世紀には新カント派が、「新興国」日米の大学哲学におけるスタンダードとなる。

「音楽の国」ドイツの素地もこの時期に作られた。1801年、ドイツで「国民主義的」な音楽史叙述が誕生する。「ドイツ音楽史」という形で、ひとつの国に対象を限定した音楽史叙述はヨーロッパでもはじめてのことであった(吉田2015, 13)。音楽は和声ゆえに純粹芸術になり、和声こそ、ドイツ人がもっとも得意(吉田2015, 28~9)とする技法である、というのがその趣旨であった。同時に、オペラなどの声楽や舞曲ではなく、器楽こそがヨーロッパ音楽史の最先端とする歴史観が提唱され、和声による器楽、すなわち交響曲こそが純粹音楽として最上位に君臨し(吉田2015, 97, 108)、それがすなわちドイツ独特の音楽であるとする「哲学」歴史観が提唱される。いずれも、愛国的な思想家歴史家による、器楽の国ドイツの文化的優位(吉田2015, 109)の主張であり、「普遍人間的理念をそのままドイツ的なものに横滑りさせる、近代ドイツのナショナル・アイデンティティ基本構造」(吉田2015, 128)の発露だった。そのシンボリック存在がベートーヴェン(1770~1827)である。こうして、音楽は「もっともドイツ的な芸術」(トマス・マン)(吉田寛2013a, 15)、「ドイツの国民芸術」(吉田2015, 151)とされ、ナチス・ドイツの高官ゲッペルスによって政治的イデオロギーにまで高められる(吉田2013a, 16)。リヒャルト・

シュトラウス、フルトヴェングラー、ワグナーに見られる通り、「ナチスは音楽を支配することによって、自らの政策をドイツ国民に浸透させた」(福井31)。

§ 4 「教養市民層」の実態

それにしても、教養市民層出現の深層には何があったのだろうか。また、新人文主義やドイツ音楽の実態はいかなるものなのだろうか。

(a) 教養市民層の形成

教養市民層形成の経緯をさぐるためには、ふたたび30年戦争終結時に目を転じなければならない。30年戦争による国土荒廃により、フランク王国以来の伝統封建層は没落したが、全国400以上にもおよぶ領邦国家は存続し、また、農奴制農園領主である新興階層ユンカーが台頭し、とりわけプロイセンを牛耳る存在となる。ビスマルクの出身階層でもあるユンカーは、軍国的気質をもち、説得や妥協ではなく命令によって他人をコントロールし、かれらによって形成された宮廷では、フランスとその「文明」が好まれた(曾田29)。

一方、宗教改革以来、都市や村落では、聖書のエピソードを教える教会学校、また、聖書を読むために必要なラテン語を教える学校がつけられる。その担い手となったのは、教会や宮廷、大学などの制度には属さず、その外に位置するディレタント(曾田32)であり、かれらにとって18世紀における理性的な啓蒙主義は、「上からの抑圧的なもの」(曾田37)にしか映らなかった。

聖書学校の担い手であるディレタントが、すなわち、人文主義的の古典教育層となる。かれらは、同時に、政治力・軍事力のあった宮廷のユンカーに対抗し、また、実科学校出身の、経済的に裕福だが「教養」とは無縁の商業・手工業従事層(野田31, 吉田2015, 20~21)と政治的、経済的に

せめぎ合う。こうした階級闘争の中で形成されたのが教養市民層である。

プロテスタント教会補助教育を契機に生まれた階層のアイデンティティの拠り所となったのが、「文化」「教養」という、新たに構築された価値である。すなわち、ユンカーが理想とするフランス的文明に対抗する原理として、古典主義的理想主義的人格主義・人間主義（エリアス1996／2015, 15-6）的な価値としての「文化」が主張され、「文化」すなわち「宗教，科学，建築，哲学，詩」が「自分たちの自由と誇りの領域」（エリアス1996／2015, 149）と主張される。また、ユンカーの軍国主義的傾向に対抗するため、「軍人的美德や暴力活動はあまり評価されなかった…」（エリアス1996／2015, 337）。一方、商工農業従事者は、いわゆるキリスト教的罪惡倫理とは裏腹に、「非常に強く外面化された恥の文化」（ミュシャンプレッド5）に組み込まれていたが、教養ディレッタントにとって、こうした非教養的市民層は快楽主義者として軽蔑の対象だった。

1800年前後、教養市民層は、それが形成されたと同時に、自己延命に走る。そのためにかれらが政治闘争の末、勝ち取ったのが、大学生の一年志願兵特権，行政・司法・教師・医師・聖職者国家資格試験制度整備だった。

教養市民層の中核となるのは大学教授だった。かれらは、教養理念の実践者として一般大衆の畏敬の念，あるいは教養信仰（野田194）をかきたて、あるいは、現実解釈や秩序構想を提供するイデオログだった。とはいえ、その解釈・構想は、実用主義的なものや対象分析的であってはならず、人格の調和的発展を謳うものでなければならなかった（野田193）。こうして、大学や大学教授を異常なまでに栄光化する特異な体質（野田36）、学問イデオロギー（野田22）が醸成される。

非教養市民層に対しても、教養市民層は、民衆向けの人生の拠り所を提供したが、それはあくまでも、教養理念にたいする畏敬の念をかき立て、民衆を教養市民層の指導に従順に服させる種類のものでなければならぬ（野田196）。そのためにかれらは教育制度や教会（野田196）を十分に活用

した。たとえばゲーテは、キリスト教に好意的無関心とよぶべき態度を取っていたが、それは、自己実現を目指すことができる自分たちのような「高潔な人」と違って、それができない人にはキリスト教が支えになる、という趣旨のものであった（野田197）。同様の態度はカントやヘーゲル、ランケにも共有された（野田199）。

(b)教養市民層の変質

1871年普仏戦争でプロイセンが勝利し、第二帝国が成立すると、ユンカー・貴族層の勝利が決定的となり、軍人的価値観がドイツで支配的となり（エリアス1996/2015, 15-6）、その一方で、大衆ナショナリズムが台頭する。人口のごく一部を占めるにすぎない教養市民層とその新人文主義・理想主義は衰退と形骸化の道を歩み始める（エリアス1996/2015, 212）。

ユンカーの勝利は、教養市民層予備軍である大学生、また、一般庶民の心性への軍人的価値観の浸透をもたらした。イギリスやフランスで首都の社交界にあたるものは、大都市や都会というものが存在しないドイツにおいては、大学があった地方小都市における学生団体だったが、そこでは私的決闘が強制され（エリアス1996/2015, 56-7）、ドイツの大学生にとって決闘（エリアス1996/2015, 70）は早くからアイデンティティのひとつだった。「肉体的に弱く武器にも長けていない者に対して、肉体的に強く暴力手段も使えるものが無理矢理最高の名誉を獲得することを認める戦士の基準」が決闘だ（エリアス1996/2015, 59）。軍国主義的傾向や戦士の行動、暴力行動は、第二、第三帝国を通じて高い評価対象だった（エリアス1996/2015, 337）。こうして、道徳や共同体の習慣によってではなく、社会や他人からの強制的支配にしたがって衝動を抑制する人格構造（エリアス1996/2015, 112）が形成され、ユンカー的伝統である、交渉・説得ではなく「命令と服従という軍事的モデル」（エリアス1996/2015, 14）が、学生や庶民のあいだでも支配的になる。

マックス・ウェーバーは自身、教養市民層出身であり、予備大尉の地位をもっていたが、しかし、自由・決闘・飲酒・「サボリ」を奨励する学生組合で育ち、縁故関係で世を渡る教養市民層を、「学者文化人」(野田80)、「メッキを塗った平民」「成り上がり者」(野田81)、「下層民の民族」「徹頭徹尾平民的」(野田82)などとよんで徹底的に嫌悪したのだった。

こうしたなか、1880年代、それまでの「教養」に代わって、教養市民層自己防衛の拠り所として声高に言及されるようになったのが「文化」だった(野田38～9)。新カント派ヴィンデルバントなどが唱えた「文化の哲学」、カール・ランプレヒトによる「文化史学」、また、「文化国家」、「文化政策」、「対外文化政策」などといった一連のスローガンがそのあらわれだ。とりわけ、1890年頃理論化された「文化国家」という国家理論は、「教養」を資本に地位向上をめざす教養市民層が、君主を助ける官僚養成の名目で大学への国家的支援を仰ぎ(秋野299)、それによって、支配者と教養市民層が貴族の力を削ぐために編み出した理論であった。それは、19世紀になっても統一国家が実現せず、オーストリアなどを含む大ドイツ主義と、それを含まない小ドイツ主義との葛藤に揺れた「ドイツ民族」を「文化」によって統合しようという目標と、それによって自分たち、教養市民層の優位(野田40)を確保しようという目標を同時に達成するための戦略だった。

にもかかわらず、19世紀末になると、工業化・都市化による大衆社会の形成、プロテスタント勢力にかわるカトリックもしくは社会民主主義政党の台頭(野田37)、自然科学を中心とする専門家の活躍により、教養市民層の危機はさらに深刻なものとなる。

一方、「ドイツ民族」の、「完璧な統一や団結を求める要求」(エリアス1996/2015, 374)が高まり、やがてそれは、「真の共同体再建を可能にする異常な出来事に対する願望」(エリアス1996/2015, 383)となる。こうした中、勃発したのが第一次世界大戦だ。大戦勃発を大いに歓迎したのが、地位低下に苦しんでいた教養市民層だった(野田42)。第二帝政下におい

て教養市民層が苦しんだ反動から、世界史を黙示論的に解釈し、大戦という審判において再び主役を演じようとしているドイツ民族精神（野田45）の国民一体感（野田47）、民族という宗教（野田44）を賞揚する運動には、マイネッケ、トレルチェ、トマス・マン、ヘルマン・コーヘン、ルドルフ・オイケン、カール・ブッセ、リヒャルト・デーメルなど（野田47）、当時のほとんどすべての知識人が参加したのである。

§ 5 「ドイツ文化」の内実

「ドイツ文化」の担い手は、ユンカーや一般市民に対して、大学教育を足がかりに社会の支配層たらんとした「教養市民層」であった。では、かれらの言う「文化」「教養」「学問」そのものは、いかなる内実を備えていたのだろうか。

当初、教養を、やがて文化を旗印にした教養市民層を特徴づけ、ドイツ文学を生み出したのは新人文主義であり、その旗手はフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフだった。ところが、ヴォルフの業績については、近年、疑義が提起されている。

ヴォルフの業績は大きく、大学やギムナジウムにおける古典学教育プログラムとホメロス不在説に区別される。

ところが、前者の古典古代学総合プログラムは、ヴォルフの師ハイネのものと同じであり、ハイネの案はロバート・ウッドから借用したものであった（グラフトン403）。ヴォルフの案は、古代研究をする以上、テキストだけでなく、当時の歴史や生活風習などふまえ、古代人になりきらなければならないというものだったが、それは、16～7世紀の文献学者がすでに実践していたことであり（グラフトン410）、1721年トゥレイユは「当時のアテナイ人たちと同じように行動し、考えなければならない」と主張している（グラフトン412）。「ヴォルフの主義主張でもっとも傑出したものは借り物だった」（グラフトン411）のである。

一方、「ホメロスが詩を書いたわけではなく、歌い手の記憶に保存されてきただけなので、大幅な改変をうけているという議論は、アエリアヌス、キケロ、プルタルコス、ギファニウス以来、唱えられており」(グラフトン420)、「18世紀文芸理論ではありふれたものだった」(グラフトン419)。しかも、ヴォルフはこうした先行研究のすべてを引用し、かつ、自分の新説と主張した上に、敵対者が登場すると、自説の非革命性を主張したという(グラフトン421)。

にもかかわらず、ヴォルフの業績は、のちのドイツ、さらにアメリカ合州国において、文献学的テキスト批判の模範とされ(グラフトン454)、神話化・神格化された。

一方、「フンボルト理念」は、近年、まさにそれが神話であったことがあきらかになった。「フンボルト理念」は、先に述べたように、1810年ベルリン大学創設時にその創設理念として掲げられたものと信じられていた。ところが、実際には、「フンボルト理念」がその存在を知られたのは1903年のことである。フンボルト理念が知られるようになったのは、1910年、当時28歳だったベルリン大学私講師エデュアルト・シュプランガーが、フンボルト大学創設100年を記念する紀要に書いた「フンボルトとその教育改革」で取り上げたのがきっかけである。この論文でシュプランガーは、ベルリン大学を賛美し、精神科学や大学の存在意義を主張するため、大学の倉庫で眠っていたフンボルトの草稿を学問擁護の切り札として利用したのだった。ベルリン大学が、その創設時、他大学に先駆けて研究中心主義を採用したという証拠はなく、現実の大学は「妥協の産物」(野田, 24)であり、その主眼は、官僚養成機関(野田, 25)としての機能であった。「フンボルト理念」は神話である。

ドイツを「音楽の国」たらしめたベートーヴェンの神話化についてはすでに多くの研究がある。生前はボン周辺においてしか知られていなかったベートーヴェンが現在のドイツ地域で著名な存在となり、また、ドイツの

文化英雄，文化的アイデンティティの拠り所になったのは，普仏戦争の前後，ドイツ統一を目指すさまざまな団体によって《歓喜の歌》が象徴的に用いられ，ビスマルクを顕彰する目的で各地に建てられた「ビスマルク塔」の前での儀式などでつねに演奏され，英雄的風貌の肖像画が生まれ，各地にベートーヴェン記念碑が建造されたことによることである（渡辺，モッセ，吉田2015，152～3）。

しかも，直前までのモーツァルトらと，ベートーヴェン以降の「古典主義」とのあいだには重大な相違があった。生涯に作曲した交響曲数を比較すればわかるように，モーツァルトに比べてベートーヴェン以降のひとびとは作曲に膨大な時間を要しているが，それは，旋律ではなく和音を操作しなければならないという事情以外に，聴衆の反応が計算できないという理由があった。以前は，限られた，耳の肥えた貴族だけを相手にしていればよかったのに，19世紀以降は，「教養のない」新興中産層を対象としなければならない。古典派の楽曲が，「煽りに満ちた」，いつまでも終わらない構成になっているのはそのためである（岡田）。

ベートーヴェンなどの作品が普遍的な価値を持つことの客観的根拠はない。それが現在，世界各地で好まれていることも，作品の普遍性や品位の証拠にはならない。どんな「作品」でも，専門家に評価され，学校教育に取り入れられれば，「優れた作品」として受容される「象徴革命」（ブルデュー）がおこるからである（稲賀164-5）。現在，コンテンポラリーアートにおいては，大仰なベートーヴェン，ワグナーを皮肉る作品も登場している。

ゲーテ，シラー，ベートーヴェン，カントといった文化英雄が顕彰されるのは，ドイツの国家統一，国民形成のメカニズム故である。もとより，中世までのキリスト教にかわる統合原理として，「芸術」を国家宗教とすることはフランスなどでもおこなわれた。ところが，ドイツは，この点でも特殊だった。通常，国民国家とは「一民族・一言語・一文化・一国家」

を理想とし、19世紀に同時多発した国家形態とされる。だが、「ドイツ語圏」も「ドイツ民族」も、ドイツの政治的国境と一致しない。とりわけ、先述したように、オーストリアを包摂するかどうか大きな問題だった。こうした状況で、「ホフマンスタール、モーツァルト、リヒャルト・シュトラウス」を文化英雄とするオーストリアとの差異化のため顕彰されたのが「ゲーテ、シラー、ベートーヴェン」なのである。400を超える小邦乱立の「ドイツ」が、国家として統合されるための国策として採用されたのが文化振興・文化信仰だった。

一方、19世紀末以降、工業化・都市化・軍国化・国民国家形成、すなわち近代化とともに大衆レベルでの文化が問題となる。30年戦争以来荒廃の地であったドイツの国土は、ミュンヘン（長谷川2000、33）、ハンブルク（長谷川2000、38）など、ほとんどが、19世紀後半まで中世状態だった。ドイツには、英仏のような近世、日本の江戸期がなかったのである。農村を生活の場とし、自他の区別がなく、自己制御が不十分な中世的心性を生きていた、ドイツのひとびとは、19世紀末になってあまりにも急激な近代化を経験する。近世的諸制度・諸文化がなかったドイツには、その結果、「20世紀における抜きん出たモダニズム国家」、あるいは、純然たるモダニズム国家が出現する。

20世紀前半、その反動が一気に浮上する。近代化の反動は、フランス的英米的文明の客観主義・合理主義・経験主義・効用主義への疑いとなる（エクスタインズ1991、116）。「まなごしは内面へ、自我へと」（OAG1996、22）向い、内省的な傾向が強まる。反文明の傾向は、中流階級の原始主義（エクスタインズ1991、126）や神話志向（エクスタインズ1991、15）を、反経験主義は抽象への傾向を生み、さまざまな歪みを生む。ワンダーフォーゲル（OAG1996、22）やヌーディスト運動（Freie Körper Bewegung, Karina & Kant1999、27）、体操ブーム（エクスタインズ1991、126）、表現舞踊（エクスタインズ1991、65）などの「世紀末身体文化」、自然イデオロギー、

【表1】ドイツの急成長（エクスタインズ1991）：2列目はベルリン人口

		400近い公国.
18-9c		ベルリン, ドイツ帝国首都 (エリアス1996/2015, 11)
1800	17万	宗教多様, 独語「半ば未開言語」(100).
1850	40万	自然民族領土商圏宗教≠境界線
1860		就学率100% (他国義務教育1870°). 大学, 技術主義。
1866~71		政治的統一, 中流階級 (101). Kultur (103). 方向感覚喪失。
1870		鉄鋼英の1/4.
1893		「男女は並んで座ってはいけない」(66)
1910	200万	大伯林400万
1912		ターキートロット, タンゴ
1914		鉄鋼生産英仏露合計上まわる (104).
1924		自国の戦闘精神的理念 (133). 規則遵守意識希薄 (233).

身体イデオロギー, 生活改革運動, 青年運動, ドイツ工作連盟などの結社化 (海野1999, 166) がそれであり, その多くは国家統合の細胞となった。

§ 6 ドイツの文化構造

「ドイツ文化」は, 文学・思想などの人文学研究, 音楽などをその実態とする。ところが, こうした「ドイツ文化」が生まれたのは19世紀のごく短期間のことであり, それ以前のドイツは「文化」的にまったく不毛だった。19世紀に「教養」「文化」に注目されたのは, 人口の1%に満たない教養市民層が, ユンカーや実業的な市民に対抗するために, 「大学教育」履歴をよりどころとし, 国王国家からの助成を得るために「教養」「文化」があたかも至高の価値であるかのように主張し, 制作したからであった。「教養」「文化」は, 階級闘争の道具として生まれ, 国民統合の道具として利用された。その結果, ドイツにおいて, 文化は自生するものではなく, 人工的に作るものとある。多額の文化助成がなされるのはそのためであり, 一方, 大衆文化・都市文化・生活文化・ポップカルチャーなど, 無名の民

衆から自生する文化は、存在しないか、希薄である。

Ⅲ 「ヨーロッパの優位」神話と日本の文化構造

ドイツの文化構造は、ドイツ固有のものであり、ヨーロッパにおけるフランスやイタリア、イギリスなど他国と共有されるものではない。しかし、ここでドイツ文化幻想を支えるもうひとつの神話、「ヨーロッパの文化的優位」について、ここでは詳説できないが、その実態を簡単に明らかにしておく必要がある。以下、ヨーロッパの「文化的優位」という幻想に対する反証を簡単に挙げたあと、ドイツの文化構造のあり方を相対化するため、日本の文化構造を瞥見したい。

§ 1 「ヨーロッパ優位」の実像

ヨーロッパの「文化的優位」が幻想に過ぎないことを示す証拠としては、次のような論点を挙げるができる。

第一に、ドイツを含むヨーロッパ諸国の文化的正統性の根拠として、古代ギリシアやローマとの連続性が主張されるが、古代ギリシア、ローマと、現在のヨーロッパ、とりわけアルプス・ライン川以北のひとびととのあいだに血統的連続性はない。現在のヨーロッパ各国民はローマを滅ぼした蛮族ゲルマン民族の末裔である。そもそも、古代ギリシア、アテナイは、2万の市民を8万の奴隷が支える奴隷社会であり、ローマも変わらない。古代ギリシアについては、その担い手がアフリカ系のひとびとであったとする説もある（バナール）。

第二に、ヨーロッパが他の世界に対する優位をもったのはたかだか19世紀になってからのことである。17世紀まで、ユーラシア大陸東西貿易においてヨーロッパは圧倒的な貿易赤字状態だった。東方からは中国の絹や陶磁器、南方の香辛料、インドの綿、ペルシャの織物などの物産が輸出され

だが、ヨーロッパからの「輸出品」は「銀、銅貨、奴隷、武器」にすぎなかった。ヨーロッパは、最初は域内、やがてメキシコなどで産出される銀でかろうじて破綻を免れていた（フランク、貫）。

第三に、この頃、第三世界であったヨーロッパに、宣教師の手によってもたらされた宋学や易学などはライブニッツなどに衝撃をもたらし、科擧の制度はナポレオンやプロイセンに採用されて、その官僚制の基盤となった（Lee）。

第四に、ロンドンやパリなどの「美しい街並み」は、いずれもナポレオン三世など、19世紀中頃に整備されたものであり（鹿島、コンリン）、このとき一斉に「伝統の創造」（ホブズボーム）が進行した。

パリが、現在のような「美しい」市街を整備し、ヨーロッパ諸国が近代国家としての体裁を整えたのは、日本が明治維新を迎えるほんの数十年、十数年前のことだった。一瞬の眺望を固定化し、実体化するパースペクティヴィズムの結果が、ヨーロッパ優位という幻想なのである。

§ 2 日本の文化構造…ドイツとの対照

ドイツの文化構造がいかに特殊であるかは、日本の文化構造と比較することによってあきらかになる。ここでは、比較の論点として、しばしば、ヨーロッパ優位の根拠とされる、(1)大学などの高等教育機関、(2)政治思想、(3)精神的規範、(4)民主制、(5)町民思想・気風、(6)文化創造主体、の六点をとりあげよう。

ヨーロッパにおいては中世の11世紀にボローニャ大学、12世紀パリ大学、14世紀ケルン大学など、はやくから大学が存在し、それが非ヨーロッパ世界に対する知的学問的優位の証左とされる。しかし、その実態は、宗教施設付属の、または、領主による官僚養成機関であった。フーコー『狂気の歴史』に見られる通り、17世紀フランスにおいて、学生は、浮浪者などと同様、逮捕・監禁の対象だった。19世紀初め、フィヒテがベルリン大

学学長になった際も、市内で飲酒の上、乱暴狼藉を働く学生に対して注意を喚起している。

一方、歴史上、もっとも古い高等教育研究施設は、紀元前7世紀、現在のパキスタンに創設されたタキシラ僧院が最古となる。中国では紀元前2世紀、前漢に官僚養成機関としての大学が作られた。日本では、聖徳太子が『三教義疏』において万人の教育を説き、また、7世紀には中国に倣った大学寮、10世紀には和気氏など各貴族家による私設の大学、13世紀には金沢文庫、15世紀には足利学校、さらに、比叡山や高野山の研究施設などが設けられた。足利学校などは、ヨーロッパ人宣教師によって、当時のヨーロッパの大学に匹敵するものとされている。江戸期には各藩に藩校が設けられ、18世紀に設立された昌平坂学問所は東京帝国大学の前身の一つである。

ヨーロッパでは、17世紀の30年戦争に参戦した、当時の列強を代表する将軍たちのほとんどは字が読めなかったが、同時期である家光の頃、大名はほぼ全員読書習慣をもっていた。18世紀には庶民の識字率も向上し、大衆向けの娯楽本が商業出版されている。とりわけ、寛永年間（1624～44）には、古典的教養再興熱がたかまるとともに、仮名草子の教養主義、貞門俳諧、狂歌などもおこり、出版による教養の流布・浸透がおこった（鈴木2）。

政治思想については、すでに述べたように、1215年のマグナカルタ、18世紀の自由思想など、「民主主義」などは欧米起源であるとされている。一方、御成敗式目（1232）は、鎌倉時代の武家法だが、そこでは、幕府の安堵状さえあれば相続手続きが可能とされ、その結果、長男だけでなく、庶子・末子・女性・妻・養子にも相続権は原則、認められていた。義務を果せば権利をえるし、義務を果さなければ権利を失うという能力主義・実績主義は、地下人出身の武家に当然のモラルだが、これは、やがて武家社会から、一子相伝は器量によるものとされた能役者や町人にも浸透した。

黒澤明『七人の侍』は、村を守るために侍を雇う農民の物語だが、実際には、村落防衛は、農民がみずから武器をとっておこなっていた。戦国大名は一揆の長あがりであり、その「傘連判状」は平等参加の証だった。共同体は全員参加で形成されるものであり、各自が秩序形成に自発的に参加し、それを生きがいとする公的秩序協働形成の気風があった。そもそも、民主主義の形態は多数であり、「普通選挙」の有無は、組織票の存在、アメリカの「民主／共和」支持が先祖代々決まっていること、ナチス政権は選挙で選ばれたことなど考えれば、ある社会時代が民主的であったかどうかを判断するための決め手とはならず、形式的指標にすぎない。むしろ、組織内の指揮系統や合意形成手法に注目する必要がある。

文化創造についてみると、ヨーロッパでは、たとえば舞踊が、16世紀にイタリア都市国家の宮廷、17世紀にはブルボン王家の宮廷など、王侯貴族からのトップダウンによって形成された。それに対して、『万葉集』（759）には農民の作品が取り上げられ、平民主体で申楽などが生まれ、永長大田楽（1096）では、身分の上下無関係に乱痴気騒ぎが生じ、申楽が発展して能（15世紀）となり、歌舞伎（17世紀）は幕府の弾圧にもかかわらず、江戸町民の支えで繁栄し、農民町人のお稽古文化が盛んであった、など、日本には庶民からのボトムアップの文化創造構造がある。庶民の生活についても、農作業や勤労を宗教行為とした鈴木正三、各地各業を接続するという商行為の価値、企業倫理（コンプライアンス）・暴利禁止を説いた石田梅岩、絶対的民主主義・神農思想の安藤昌益など、各業種それぞれ独特の価値・倫理・心がけが説かれた。ちなみにこれは、状況ごと、各人ごとの「生存の美学」を志向するポスト・モダンのモラルに近い。

お稽古文化やボトムアップの文化創造など、文化は生まれるものという、日本における文化構造は、少数のエリートが牽引し、大学教育や、政府による巨大な文化助成によって作られるもの、という、ドイツ的文化とは正反対の方向を指している。

IV 余録

以上の考察は、単なる歴史的回顧ではない。現在の状況に直結する意味をもっている。

2014年10月、文部科学省高等教育局より、全国の国立大学における人文社会科学系学部学科の廃止縮小を示唆する通達がだされ、2015～16年において、国立大学の人文社会科学系学部学科を廃止・縮小・合併し、自然科学系実学重視する措置が次々ととられた。

こうした動きそのものは、国家予算を制限するニューリベラリズム的政策の一環でもあり、たとえば教育福祉予算を一気に30%近く削減したベルギー政府、大学の人文社会科学系学部を縮小するオーストリア政府などの動きとも連動している。そもそも、大学予算の財源は国民の税金なのだから、その支出の正当性を説明し、税金を投入するに値することを納税者に納得してもらおうとするのは、当然の義務である。

人文系学部維持の根拠として言及されるのは、先にも述べたように「フンボルト理念」であった。「天文学」が天の原理を考究するように、「人文科学」は人間の歴史と知恵を反映するものなのだから、容易に棄却することは許されないというわけである。

ところが、本稿においてあきらかになったのは、「文化」や「教養」といった価値理念が、ヨーロッパにおける後進地域ドイツにおいて、一部の宗教関係者が自己延命、階層間闘争のために制作し、利用した人工的価値であり、「フンボルト理念」は神話にすぎないということであった。すなわち、「文化」「教養」という理念・価値に依存するだけでは、人文社会科学系学問の存続理由を担保することはできないのである。

では、人文社会科学系学問の存在理由は立証できないのだろうか。逆に、本稿は、まさに人文社会的思考の必要性を証示するものである。もし本稿

【表2】関連文化史年表

ヨーロッパ	ドイツ	日本
BC4C. 民主主義, 哲学, 理性, 科学, など		
	375民族大移動	7c 三教義疏, 大学寮
		759万葉集
1088ボローニャ大学	962神聖ローマ帝国	1096永長大田楽
		13c 鎌倉新仏教
1215マグナカルタ～	1241ハンザ同盟	1232御成敗式目
14～6C. ルネサンス: 紙・羅針盤・火薬	1388ケルン大学	1346『正平版論語集解』
	1455グーテンベルク	
	1517ルター15箇条	
		1485山城大一揆
18世紀自由思想		1603出雲阿国
	1618 30年戦争	17c 江戸町民思想
	1774『ウエルテル』, 1781『純理批判』	
	1810ベルリン大学, 1823『第九』	

の議論が成功しているとすれば、それによって、本来、正当な価値のないものを崇拜し、無内容無根拠な理念に振りまわされ、いたずらに自己卑下する愚が避けられる。それに代わってどのような戦略を練り上げるうえでも、歴史的文化論的哲学的分析は不可欠である。人文社会系的思考は、ソクラテスの言ったように「よく生きるため」、ではなく、そもそもグローバル化された状況において「生き延びる」ための武器なのである。

引用文献

- 秋野有紀「ドイツにおける文化振興の法制化をめぐる議論の陥穽としての「文化国家」：「文化国家」概念の形成とフランクフルト市民文化の成立過程の比較から」、演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学第1集, 2008。
 稲賀繁美『絵画の黄昏』名古屋大学出版会, 1997。

- 海野弘『モダンダンスの歴史』新書館, 1999.
- エクスタインズ, M., 『春の祭典』阪急コミュニケーションズ, 1991.
- エリアス, N., 『文明化の過程』法政大学出版局, 1993.
- エリアス, N., 著, ミヒャエル・シュレーター編『ドイツ人論：文明化と暴力』法政大学出版局1996/2015.
- 岡田暁生『音楽の聴き方：聴く型と趣味を語る言葉』中公新書, 2009.
- 鹿島茂『怪帝ナポレオン三世』講談社 2004.
- グラフトン, A., 『テキストの擁護者：近代ヨーロッパにおける人文学の誕生』勁草書房, 2015.
- 小林繁子『近世ドイツの魔女裁判：民衆世界と支配権力』ミネルヴァ書房, 2015.
- コンリン, J., 『フランスが生んだロンドン, イギリスが作ったパリ』柏書房, 2014.
- 清水克行・高野秀行『世界の境界とハードボイルド室町時代』集英社インターナショナル, 2015.
- 鈴木健一編『浸透する教養：江戸の出版文化という回路』勉成出版, 2013.
- スタール夫人『ドイツ論』鳥影社・ロゴス企画部, 2000.
- 曾田長人『人文主義と国民形成：19世紀ドイツの古典教養』知泉書館, 2005.
- 貫 成人「ヨーロッパ中心主義という誤謬—A.G. フランク『リオリエント』の射程—」『専修人文論集』第71号, 専修大学, 2002.
- 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫, 1997.
- 長谷川章『世紀末の都市と身体』ブリュッケ, 2000.
- バナール, M., 『黒いアテナ』藤原書店, 2004.
- 福井一『音楽の感動を科学する：ヒトはなぜ“ホモ・カントゥス”になったのか』化学同人, 2010.
- フーコー, M., 『狂気の歴史』新潮社, 1975.
- フランク, D., 『リオリエント』藤原書店, 2000.
- ブルデュー, P., 『芸術の規則Ⅱ』藤原書店, 1995.
- ホブズボーム, E., 『作られた伝統』紀伊國屋書店, 1992.
- ミュシャンブレッド, R., 『近代人の誕生：フランス民衆社会の習俗の文明化』筑摩書店, 1992.
- モッセ, G., 『大衆の国民化』柏書房, 1994.
- 吉田寛『〈音楽の国ドイツ〉の神話とその起源：ルネサンスから18世紀』青弓社, 2013a
- 吉田寛『民謡の発見と〈ドイツ〉の変貌』青弓社, 2013b.
- 吉田寛『絶対音楽の美学と分裂する〈ドイツ〉』青弓社, 2015.
- 渡辺裕『聴衆の誕生』春秋社, 1998.
- Eun-Jeung Lee: *Anti-Europa –Die Geschichte der Rezeption des Konfuzianismus und der konfuzianischen Gesellschaft seit der früheren Aufklärung;- eine ideengeschichtliche Untersuchung unter besonderer Berücksichtigung der deutschen Entwicklung*, LITVerlag 2003.

Lilian Karina, Marion Kant, Tanz unterm Hakenkreuz, Henschel, 1999.

Heyden White, Metahistory, Johns Hopkins University Press, 1973.

『ドイツ／ダンスの100年』東京ドイツ文化センター（1996）=OAG1996